連合版 オトナの社会科見学 第100回

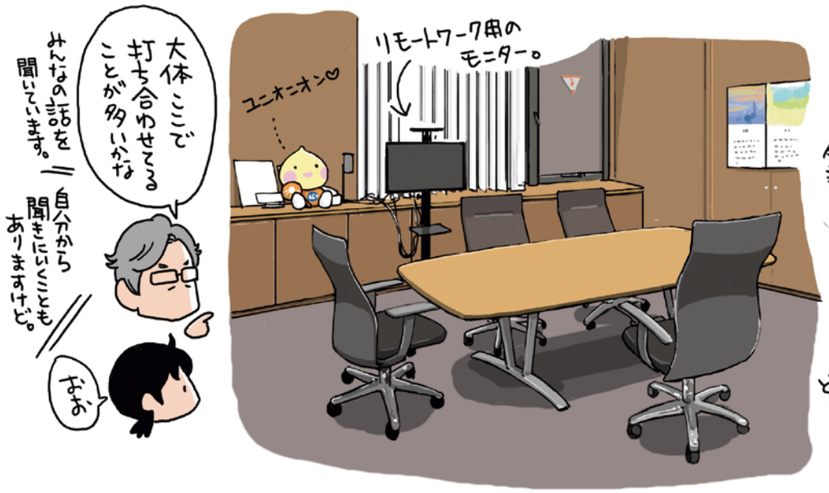
総と文＝岩井友子

連合事務局長

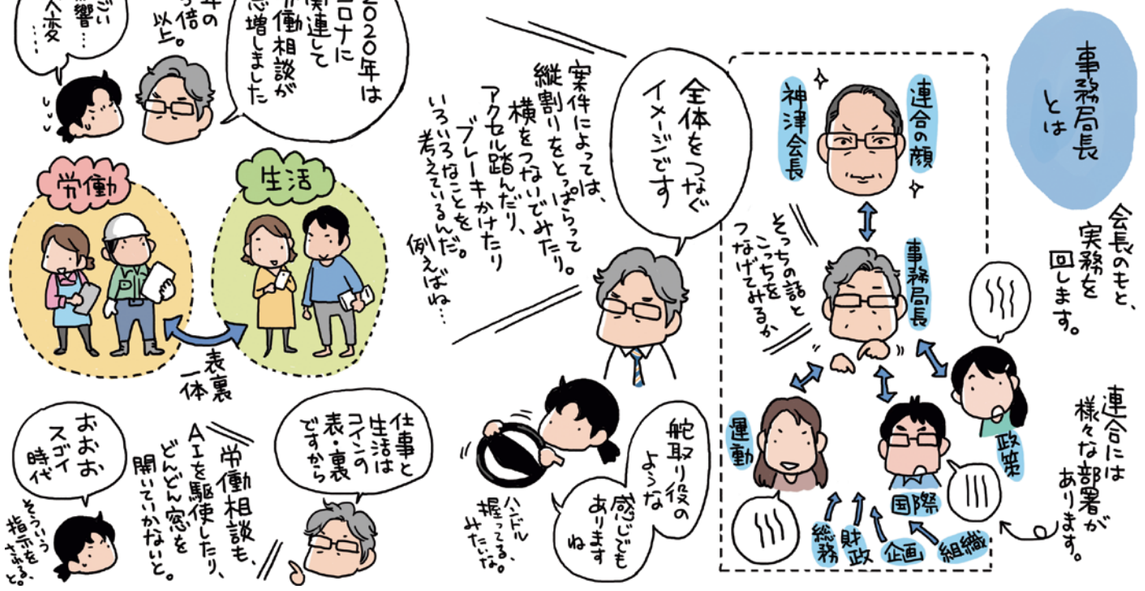
相原康伸

1960年東京都生まれ。法政大学経営学部卒業後、トヨタ自動車株式会社入社。トヨタ自動車労働組合執行委員、副執行委員長を経て、2002年全トヨタ労連事務局長に。2008年自動車総連事務局長、2012年同会長および連合副会長を歴任。2017年10月より連合事務局長を務める。

今回は連合の事務局長にお話を伺いに来ました！



事務局長とは



大事なのは〝対話〟

事務局長になってから、構成組織・地方連合会を訪れ、対話を重ねてきました。

地方連合会との総対話

大学で講義もしています

「連」合は、全国27（1大学院を含む）の大学で寄付講座を行っています。

いつでもそばにいる存在に

「僕みたいに、会社に入って、既にある組合に入り専従っていう流れは、20世紀型の労働組合かもしれないよ。だから僕の経歴は、これからの世代のロールモデルにはならないかもね」と取材早々に切り出した相原さん。連合の事務局長になって10月で4年目に入りましたが、「今年は3年目までとは色彩が全然違う」と感じたそう。コロナ禍で浮き彫りになった、フリーランスなどの働き方の多様性。「連合が掲げる『すべての働く人のために』というのは嘘じゃない。でも日本の労働者が6000万人で、連合がカバーしているのは700万人ほど。その『すべて』とはをしっかりイメージできないといけないと思うんです」。

事務局長になって以降、全国で対話を重ねるうちに、「ひと握りの働く人の姿しか見えていなかった」と痛感したそう。「仕事は一人では成り立たない。互いをおもんばかって、常に対話を心がける。労組は、それができるところだと思うんです」。実家は自営業。両親のもとで働く従業員を間近にして育ちました。「大人の一人ひとりの働く事情を、幼いながら感じていたのかな、と思います。あの原体験が、僕の〝働く人〟に対する見方に繋がっているかもしれないですね」。

事務局長は「連合は働く仲間のつらさを今こそ見つめないといけない」と言います。社会に開かれた窓になるために、多くの人々、様々な産業との対話を加速させたいそう。「コロナに直面する今、あれができない、ではなく、今だからこそできることにフォーカスしたいと、強く思っています」。